
僕は不老不死

マサユキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕は不老不死

【Nコード】

N0285B

【作者名】

マサユキ

【あらすじ】

現代、発展した工業や産業の中で、決して人目に触れることのない場所で研究されている生命体、『不老不死』。この物語は、心優しい不老不死の少年の心温まるストーリー。

FILE 0：プロローグ

時は西暦2006年。

その存在は全世界に見られる。しかし彼らの研究は世界政府の管理の下、秘密裏に行われていた。

あるものが問う。

「どうして我々の研究を世界に知らしめないんですか？」

そして答える。

「それはこのような存在が人々に知れたら世界が混乱に陥るからだよ…」

このような存在。

『perennial youth』

日本名

『不老不死』

FILE 1：始業式

僕は不老不死だ。

小っちゃい頃はそうじゃなかったんだけど、小学六年生の時にお父さんに変な研究所みたいな所に連れて行かれてからそうならしい……

あんまり自覚症状は無いんだけど、もう16なのに小六の時から1ミリも成長してないのがその証拠なのかな……

なんか不老不死になるかわりに成長能力と生殖能力とを失ってしまったらしい。

別に背の低いことに対して、コンプレックスなんか持ってなかったのに、そこはあんまり気にしなかった。

でも、研究とやらのせいで中学校に入れなかった僕は、我が儘を言っ
て、少しの間だけ高校に入ることを許してもらった。

今日はその高校へ初めて行く日。

夏休みが終わって、二学期が始まる日でもあった。

『今日はこの白皇学園に転校生が来ています』

全校生徒が集まった講堂に校長の太い声が響き、それと同時に講堂

が生徒の声でざわめく。

『桜井 優くん』

名前を呼ばれ、優は舞台の袖から一步出る。
すると、そこにはゆづに千を越える生徒達が……

ガチガチに震える手足を抑えて、必死に舞台の中央まで歩いて行く。

「小っちゃ〜い!!」

「小学生かよ!!」

「ほんとに高校生か？」

さまざまな声が聞こえる。

優は不老不死だけでなく耳もいい。
ついでに言うと、目も鼻も身体能力も普通の子供の比ではない。

優は、父親から可哀相な自分へのプレゼントだと言う。

「え〜っと……………」

優は紅潮した顔を俯せ、息を整える。が、昨日徹夜で考えた挨拶が全部頭から抜け出してしまつて、いくら考えても何も浮かんでこない。

口をついて出るのは

「えつと…」

や

「うーん…」

などの言葉だけ。

生徒達の罵声やどよめきがさらに優の心臓をヒートアップさせた。

「緊張すんな!!」

突如、辺りを切り裂く男の声に講堂が一気に静まり返る。

その瞬間、優の固まりまくっていた心は、なぜか一気にほどけていく感じがした。

「え」と……今日からこの学園にお世話になる、桜井 優です。

…皆とは少ししか一緒にいられないけど、どうぞ仲良くしてください。」

言い終わり、優が会釈をすると、生徒達は一気にヒートアップする。

『みんなも仲良くしてあげて下さいね?』

校長の言葉で始業式は締めくくられた。

FILE 2：初顔合わせ

「君の教室はここだよ」

そう言つて優を、まるで子供でも扱つかのように教室へと入れる教師。

「きた〜〜!!」

「うわぁ、間近で見るともつと小っせえ!!」

「可愛い〜〜!!」

歓声の他にも指笛の音やら、よく分からない叫び声やらが教室中を物凄い音量で飛び交う。

「静かにしろ!」

教師が日誌を教壇に叩き付けると、すぐに歓声は鳴り止む。

「まずは自己紹介だ」

先生は優の方を向いて、自己紹介を促した。

「えっ、え〜と……」

優は顔が火照つてきて、思わず俯いてしまう。

「…桜井 優です……」

やっこのことで声を捻り出し、会釈する。

その途端にまた沸き上がる歓声。

「静かにしろ!!」

教師がさっきより大きな声で生徒達を怒鳴る。

その瞬間、なぜか優がその声に飛び上がるほど驚く。

「せんせー転校生びびらせちゃダメじゃん!」

どこからかヤジる声が聞こえてきて、教室はまた笑い声に包まれる。

楽しそうな学校で良かった……

優はほっと胸を撫で下ろして、案内された一番後ろの席に座る。

——キンコーンカンコーン

チャイムが鳴り、HRが終わる。

「ねえねえ、優くんって本当に高校生?」

授業が終わると同時に、クラスの皆が優の周りに円をつくった。

「うん、そだよ。なんか成長しない病気にかかったらしいんだ」

優がこう言ったのは父親にこう説明しろと言われていたからである。

「普通の学校で大丈夫なのか？」

「うん、身長以外は普通だから…」

優は一つ一つの質問によく考えてから受け答えしている。

なぜなら、もし優が不老不死だということが父親に迷惑がかかる。そう思っていたからである。

しかし、それ以上に、みんなには言えない秘密を持っている。’と
いうことが優にヒーローにでもなったかのような錯覚を覚えさせていた。

優はそんな高揚感にたまらなくワクワクしていた。

生徒達に笑いかけながら、優はふと窓際の方に目をやる。

背が高く、金髪の、いかにも不良そうな男が椅子の前足を浮かせて、後ろ足だけでうまいことバランスを保っていた。

その男は一瞬優に一瞥をくれるが、すぐに興味無さげにプイと窓の外に顔をやった。

普通ならこんな不良生徒とは関わろうとは思わないだろう。

しかし、まるでそれが当然であるかのように優はその男に近付いていた。

優を取り囲む生徒達はそんな優を見るやいなや一気に静まり返り、心配げな表情を優に向けた。

「何の用だ……」

その男は優を見ようともしせずに冷やかな声で問い掛ける。

「さっき僕に“緊張するな”って言ってくれた人ですよね？」

すると、後ろから女の子が優を抱き寄せて諭すように言った。

「そんなハズないよ！

鷹見くんは始業式に出席してないんだから……」

「んーん、間違いない！だって僕見たもん！」

「見た”って……」

確かに講堂は広くて、舞台から生徒の顔など確認できるはずがない。

優にとっては造作もないことだが……

優が自分を抱き抱える女の子の顔と‘鷹見くん’の顔とを見比べていると‘鷹見くん’は急に立ち上がった

「うぜ……」

と言い残し、教室を出ていってしまった。

FILE 3：お弁当

それから一週間が過ぎた

あれから鷹見は一度も学校に来ない。

しかし、優はすっかりクラスにもなじみ、友達もたくさんできていた。

「優くん、あ〜ん」

「い、いいよ……一人で食べれるから」

優は近付いてくる美味しそうな唐揚げから、慌てて顔を逸らした。

最近、昼休みはいつも優の周りを女子生徒が取り囲んでいる。

確かに可愛い女の子に囲まれるってのは悪い気分ではない。

だが、太腿があらわになるほど短いスカート、第二ボタンまで外されたブラウス、そしてかすかに漂ってくる甘い香り。

優は正直、恥ずかしくて仕方がなかった。

「きゃははは!!」

顔、真っ赤にして、優くん可〜愛い〜!!」

それに、ほとんど同年として見られてなさそうだった。

優は女子生徒を見ないようになるべく俯いて、お弁当を食べている。

お父さんは忙しいからと自分で作ったお弁当。

優はお弁当を見ながら、最近ずっと一人でご飯食べてたな、と考える。

小さい優のために…

と、父親はキッチンを優のサイズに合わせて造ったので、料理自体は苦にならないが、たまには父親と一緒に食卓につきたい。

優は溜め息をつきながらそんなことを考えていた。

優の母親は優が小学四年生の時に他界した。

さらに小学六年生の時に不老不死になってからは優は一度も楽しい団欒をしたことがなかった。

たまに研究所で食べることはあったが、研究所の人間は皆、優のことを被験体としか見なかった。それ以来、優は研究所で飯を食べることはなかった。

「優くん…どうかしたの……？」

クラスメイトの可愛らしい顔が優のすぐ横まで近付いて来ていた。

「うひゃあ！」

思案に暮れ、周りが見えてなかったところに、女子生徒の顔が急に近付いて来たので、優は思わずすつとんきょうな声を上げた。

「あははは！何その声……！！」

女子生徒達が声を上げて笑い出す。

そんな光景を見て、拗ねた様子を見せながらも、優も思わず笑い出す。

今は……

一人じゃない……

そう思えた。

突然、優の脇の下から無骨な手が伸びてきた。

ひょいっ

簡単に持ち上げられる優の体。

優は体が掴まれているので、首を回して自分を持ち上げている人を見た。

「明智くん……？」

同じクラスの男子生徒、明智 宏一。

短髪で、清潔なイメージを崩すことなく着こなした制服が印象的な好青年だ。

「お前、ちょっと来い」

「ちょっと、明智！？」

明智は女子生徒が止めるのも構わず、小学生と変わらない体重の優の体をいとも簡単に抱え上げ、廊下を走り去り、階段を上りきり、屋上へと辿り着いた。

どさっ

冷たいコンクリートの上に無造作に投げ捨てられる優の体。

「痛っ……」

不老不死でも痛みを感じないわけではない。

「お前、いい気になってんじゃねえぞ……！」

冷たいクラスメイトの声。しかし、優にとってそんなものを人として見ない研究所員達の目に比べれば気にもならない。

「どういうこと？」

笑顔で返す優。

しかし、どうやらそれが気に入らない様子で、明智は優の胸ぐらを掴みにかかった。

「とばけてんじゃねえぞ、コラ——」

そこまで言って明智は急に赤面する。

「か、河合のことだよ……」

明智は顔を俯せながら捻り出すように言った。

ついでに言うと、河合というのは先ほど優と一緒に弁当を食べていた女子生徒の内の一人だ。

言葉の意味が分からず、優は首を傾げた。

「ま、まあ……別に河合が誰と弁当食おうが関係ないんだけど……」

「明智くんも一緒に食べよう!!」

とりあえずお腹が減っていた優は明智の言うことも聞かず、その腕を強引に引っ張る。

「お、おい!」

「ご飯はみんなで食べた方が美味しいんだよ!」

優は明智の手を引き、意気揚々と校舎の中を駆け回った。

.....

.....

そして、迷った.....

気付けば初めて見る教室のオンパレード。

「1―Bどこ〜?」

優はもうほとんど半泣きで自分の教室を探していた。

「あ〜……わかった!

俺が案内してやるから、その手を離せ!」

優は、はっ!と気付いたように慌てて手を離す。

「いててて……

たくっ!小せえくせにすげえ力だな……」

明智が優に掴まれていた手をさすりながら、そう言った時、昼休みの終わりを予告する予鈴が響き渡った。

「あ〜あ……五時間目間に合わねえかも……」

明智が諦めたような溜め息をもらす。

「ぐめ…んね……うぐっ…僕のせいで……」

明智の何気ない一言が優の涙をさらにヒートアップさせていた。

「あ〜もう、うぜっ!ほんとに中身は高校生かよ!?」

「1!…ぐめ…ひぐっ……」

嗚咽を漏らす優に明智がぎこちなく、鼻をかきながら話しかけた。

「ほら…まだ急げば間に合うかも知れねえだろ」

そう言って明智は、右手を差し出した。

「俺が案内してやるから、もう泣くな」

明智がはにかんだ笑顔を見せた。

「……うん！」

優はさらに涙を出しながら答えた。

「おい、泣くなって！」

再び泣き出す優の顔を見て、明智がオロオロとろたえる。そして、子供でもあやすかのようにおどけてみせた。

それに優が笑って返すと

「なんだよ！平気なんじゃなかよ！」
と言って小突く。

しかし、その痛みは優にとって妙に心地よく、

人の暖かみを感じさせた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0285b/>

僕は不老不死

2011年1月28日02時49分発行